



Title	明治漢文怪異小説集『夜窓鬼談』に関する研究――翻案を中心に――
Author(s)	聶, 晶
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/73489
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 （ 聶 晶 ）	
論文題名	明治漢文怪異小説集『夜窓鬼談』に関する研究 ——翻案を中心に——
論文内容の要旨	
漢字文化圏の歴史から見ると、小説は重要な中国文学の一形式として、日本の小説にも深い影響を与えている。その中で、日本人の作家が漢文で自国の風習や社会背景、思想などを取り入れ、作り上げてきた漢文小説は、独特な作品である。しかしながら、漢文小説作品の収集は難しく、また、この分野においては、日中の古典文学に関する知識、および漢文の読解力を同時に必要するため、現代文学のそれに比して研究は少ない。 一方、怪異小説は怪談の形式で作者の本音と社会現象をより深く反映しているものであるため、怪異譚は漢文小説に関する研究を行う際に、軽視できないものである。 明治時代の漢学者、石川鴻斎が創作した『夜窓鬼談』はまさに漢文怪異小説集だと言える。そのため、筆者は本論文で怪異と漢文小説という二つの要素を併せ持つこの小説集を研究対象にし、鴻斎の翻案における特徴を考察した。本論は序章から第三章までの四つの章から成る。各章の内容は以下のとおりである。 1、序章は、研究背景、『夜窓鬼談』に関する紹介、および『夜窓鬼談』に関する先行研究と問題点で構成されている。 中国小説は漢詩とともに奈良・平安時代に、遣隋使や遣唐使によって日本にもたらされたが、その後、中国の戦乱などにより、遣唐使が停止され、中国の書物の伝来にも影響を与えた。しかし、江戸時代になると、儒教の思想を受け入れたため、幕府と上流貴族らが大量の漢籍を求め、一方、市井文化の繁栄にしたがい、民衆も精神的娯楽を求めるようになり、さらに貿易のために中国書籍が中国語の教科書として必要とされるようになる。それに伴い、中国小説の高い質と大量の発行数、日本人の優れた漢文力、海運業と出版業の隆盛などの要因により、多くの中国書籍が日本に伝来した。これらの中には大量の中国小説が含まれていた。 王三慶が編纂した『日本漢文小説叢刊』（第一輯）を調べてみると日本の漢文小説の創作と刊行状況が窺える。その中に記されている小説を刊行年代によって分類すれば、十六部の江戸時代の作品、十一部の明治時代の作品、一部の大正時代の作品、一部の昭和時代の作品がある（刊行年が不明のものを除く）。特に明治時代に刊行された作品は1880年～1890年の十年間に集中していることが分かる。この時期はまさに明治期の漢学と漢文の一時復興期であった。日本漢文小説の繁栄はこれによってもたらされたといえる。そして石川鴻斎の『夜窓鬼談』（上巻明治二十二年（1889）、下巻明治二十七年（1894））も、まさにこの時期に発行されたものである。 一方、日本側では、階級社会での庶民心理や、仏教怪異譚の浸透、百物語の流行、民間信仰の流布などによって怪異譚受容の文化的基盤が作られ、これに基づき、舞台芸術にも怪談に関わる内容が増えていく。そして、海運業と出版業の隆盛にしたがって、江戸時代以降、大量の中国の小説が舶載されるようになり、その中には数多くの怪異小説も含まれていた。これらの条件の下、日本では怪異小説が流行していた。特に、数多くの知識人が、中国系の作品に基づき、日本の風習と人名をその中に入れ、自国の背景を中国の話の中にとけ込ませて翻案作品を書いた。このように、江戸時代には中国系作品の翻案が広く行われていた。明治時代の漢文怪異小説である石川鴻斎の『夜窓鬼談』の中に、中国文学に題材を仰ぐ奇譚が数多く含まれる背景には、このような歴史的経緯があった。 石川鴻斎は、日本の幕末・明治時代に活躍した詩文家・漢学者・画家である。明治二十二年（1889）に東陽堂から『夜窓鬼談』を出版し、明治二十七年（1894）に『東斎諧』を出版した。この二つの作品は上・下巻である。『夜窓鬼談』には、初版、再版、第三版という三つの刊本があるが、第三版の構成を例にして説明すると、上巻は序、凡例、鬼字解、目次、および四十六編の作品で構成され、下巻は序、目次、および四十二編の作品で構成されている（上下巻の各作品に訓点が付けられていると同時に、いくつかの作品の後ろに鴻斎の注釈や、感想などが見られ、また、挿絵もある。）。	

『夜窓鬼談』に関する先行研究を調査すると、主に四つある。すなわち、(1) 作者の鴻斎に関する研究、(2) 作品の訓読と訳注、(3) 『夜窓鬼談』の出版や刊行についての研究、(4) 各作品の内容分析および同類作品との比較研究、である。ただし、この小説集を全体的に分析したものは少ない。

2、第一章では、鬼神観を見ることによって鴻斎の宗教観の受容を論じた。

上巻本編の冒頭にある「鬼字解」と最後の「鬼神論」という二編の分析を通じ、鬼神の本質は陰と陽であることや、英雄、聖人などの人間が死んだ後祀られると、鬼神になれること、さらに鬼神と人間は司る世界の違いによってその間に越えられない壁が存在するなどの鴻斎の見方を解明し、また、鬼神に対する鴻斎の「無理やりに鬼神を知ろうとすれば、逆に災いを招く」という態度についても論じた。そして、伝説の中で姿のある神明や幽霊など具体化されたものの実在を否定し、鬼神を盲目的に信じてはいけないという鴻斎の見解を記した。

3、第二章では、『夜窓鬼談』の中国系の物語からの翻案作品を分析している。上巻の「画美人」、「続黄梁」、下巻の「藤生救雀」という三編を例として取り上げた。

「画美人」は、日本人の書生と清国の美人画から出てきた女性との恋物語を描写したものであり、中国の「画中人」というモチーフからヒントを得て作られたもので、「呉四娘」の翻案である可能性が高い。しかし、鴻斎はオリジナルな要素を付け加えている。それは、(1) 作品の主人公を清国の娘と日本の書生に設定したこと。(2) 三編の漢詩を加えたこと。(3) 作品の最後の一段落に「名画の中に霊が宿る」ことに対する評論が記されていることである。これらはこの作品の際立った特徴である。このモチーフは、中国での仏教と道教の隆盛に伴い、神仙と仏教に関する文学と絵画が盛んに創作され、また宮体詩と美人画が互いに影響を与え合いながら発展するという背景の下で生まれたものである。また、封建社会の倫理道德の束縛から文人の欲求と幻想を融合して生じたものでもある。また、鴻斎は、「画中人」のモチーフのロマンチックな雰囲気を残しながら、理性的な評論をも作品の中に加え、自身の稀にみる優れた文才と漢文力によって、新しい恋愛物語を書き、作品の文学的価値を高めると同時に、さらには物語としての娯楽性を高めたのである。

「続黄梁」は、出世への想いを抱いている三人の仲間が夢で人生の変転浮沈を経験するという物語である。「邯鄲の枕」のモチーフを翻案した作品であるが、明治時代を背景として、当時の社会状況を反映し、立身出世という明治期の人々の理想を取り入れ、偉業と権力を求めた主人公の人生を描写している。主人公を三人に設定したことで多面的に人生の浮き沈みを描くことに成功し、読者に教訓を与え、鴻斎自身の人生観も伝えている。一方、自殺というプロットの導入により、死への恐怖を導き、末路に故郷への回帰を設けたことで人生の新たな生き方を示している。危険な官途の道よりも平和な生活をするほうがよいという具体的な人生の処し方を示した点で極めて現実性を持った作品になったといえる。

「藤生救雀」は夢境と現実の世界の交錯を描写する動物報恩譚である。『聊斎志異』の「蓮花公主」との類似があるが、異同も明らかである。二作は、主人公の夢に褐衣の使者が来て、その後、動物の世界を訪れ、目が覚めると、現実世界と夢境が繋がり、その動物を救うという同じプロットを持っている。しかし、その主題および創作意図はまったく異なる。特に夢で異世界を訪れ、現実と夢を繋ぐ、というプロットはほかの類話にもよく見られるので、「藤生救雀」は「蓮花公主」を翻案したものというより、むしろそのモチーフを継承したものではないかと考えられる。

4、第三章では、日本系の物語から翻案された作品について分析している。『夜窓鬼談』上巻の「鬼児」、下巻の「偽情死」を例として取り上げた。

「鬼児」は金を盗まれた者が自殺した後、金を盗んだ犯人の子供として転生し、前世の加害者に復讐するという「鬼索債」譚である。落語の「もう半分」から影響を受けているが、独自の特徴を有していることが明らかになった。その特徴とは、(1) 物語の演劇性は減少したが、教訓性、特に悪人は災いに遭うという因果応報の思想が強調されている。(2) 話芸と文学の表現手法の違いにより、「鬼児」は「もう半分」に含まれている「鬼索債」の要素のみを取り上げ、そのオチを削った。(3) 臨場感を醸出する表現で復讐の場面を詳細に描写し、読者の懲悪心を満足させている。つまり、「鬼児」は、「もう半分」からヒントを得た上で、勧善懲悪の要素を融合して成立した物語であり、因果応報の思想を説いた教訓話であると考えられる。

「偽情死」は、落語の「品川心中」と「星野屋」の二作からヒントを得て作られたものであり、賢い遊女が客を騙した話である。しかし、物語のプロットを継承していると同時に、鴻斎は「品川心中」と「星野屋」の「客が遊女を懲らしめる」という結末を変えて、「客の計略に遊女が引っかからなかった」という結末にした。鴻斎は「偽情死」の人物をさらに複雑化している。遊女が客に特別な感情を注いだり、完全な信頼関係を作ったりすることはないとい

うことを記し、これに基づいた一連のやりとりを通じ、遊女の複雑な性格、および客との交際の知恵を表現することで、お蝶の豊かなイメージを作った。また、人物の性格の複雑さが増すにしたがって話の諧謔性も増している。つまり、鴻斎は読者に教訓を与えると同時に、物語の中に笑いを誘う要素を入れ、気楽な読み物にするように話を作っている。

上述の分析によって、鴻斎の翻案の具体的な作法をみると、主人公の設定の変更、および結末の変更という二点に特徴がある。例えば、「画美人」、「続黄梁」、「藤生救雀」、「偽情死」の四編では主人公の身分や、経歴、性格などの設定に変更がみられ、「鬼児」では結末も変えられている。これらの変更は中国系の物語において最も顕著である。主人公の設定や物語の発生舞台を他国から自国に変えるのは他の翻案作品の中にもよく見られるが、鴻斎の翻案はそれにとどまらない。彼による具体的な改変をみると、それは単なる物語の社会的・文化的背景の違いによるものではなく、例えば、「画美人」は、漢詩と故事にまつわる語や人名を入れるために、主人公の小麗を詩文に通じる清国の娘に設定し、「続黄梁」は教訓を与える範囲を広げ、より説得力を高め、教訓を強調するために、主人公を三人にし、また当時の若者が最も望んでいる職位を主人公らに付与している。「藤生救雀」は、善人はよい報いを受けるという勧善の目的を読者に伝えるために、物語の冒頭で主人公が日常的に雀にご飯をあげていること、および最後の雀の恩返しというプロットを記し、前後の文脈で呼応するように作品を作っている。鴻斎は小説のプロットを作るために翻案したのだといえる。

つまり、鴻斎は単純にほかの作品を取り上げて翻案するのではなく、オリジナルのプロットを考えて物語に挿入し、原作あるいはもともとのモチーフにある不合理な設定を書き直して、自己流の翻案作品を創作したのだと考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (聶 晶)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	教 授	中 直 一
	副 査	教 授	伊 勢 芳 夫
	副 査	准教授	平 山 晃 司

論文審査の結果の要旨

聶晶氏の博士学位申請論文「明治漢文怪異小説集『夜窓鬼談』に関する研究——翻案を中心に——」は、漢学者石川鴻齋が著した漢文怪異小説集『夜窓鬼談』に着目し、その小説集に採録された数編の漢文小説がどのような源流を持つものか、そしてその源流を石川鴻齋がどのような視点から翻案したのかを考察する論文である。その際聶晶氏は、鴻齋の小説集の元となった物語に、中国系のものと日本系のものがあることを明らかにしつつ、原作を翻案する際の作者の志向について、明治の社会背景を含めて論を展開している。

本論文序章で、第一に日本漢文小説が成立する歴史的経緯および近世日本における怪談の流行についての考察が進められ、石川鴻齋の『夜窓鬼談』が、漢文小説でありかつ怪異小説である特質の背景が分析されている。また第二に本章では、『夜窓鬼談』に三つの版があり、最終版である第三版を例に取れば、上下2巻に合計88篇の漢文怪異小説が収録され、いくつかの作品には作者鴻齋自身の注釈や評語が付加されている実態が紹介されている。そして第三として、先行研究が批判的に考察され、従来の研究では怪異小説集の個々の作品についての研究はなされてきたものの、それらを全体的に把握する研究がないとの指摘がなされている。

石川鴻齋は88篇の小説のほかに、『夜窓鬼談』上巻冒頭の「鬼字解」、あるいは上巻巻末に付した「鬼神論」において、怪談が成立する背景や怪異現象について自己の論を展開している。本論文第1章では、こうした石川鴻齋自身の論述を手がかりに、石川鴻齋の宗教観の解明が進められている。石川鴻齋は「鬼字解」および「鬼神論」の部分において、古今の鬼神観についての概観を与えつつ、鬼神や靈魂について中国や日本でどのような議論がなされてきたかを紹介している。聶晶氏はこのような鴻齋の論の分析を通じて、明治人鴻齋が読者に対し、最終的に神明や幽霊といった具体化された霊の実在を否定する立場をとったことを明らかにしている。

第2章では『夜窓鬼談』に収められた「画美人」、「続黄梁」および「藤生救雀」の3作品を手がかりに、それらがそれぞれ中国の古典文学の『夷堅志補』所収の「呉四娘」、一連の「邯鄲の枕」の類話、『聊齋志異』所収の「蓮花公主」に基づく翻案であることが指摘される。そしてこうした原作を翻案作品に改作する過程で、石川鴻齋が作品の文学性を高めつつ娯楽性の要素をも盛り込んだこと（「画美人」）、人生の浮沈を多面的に描こうとしたこと（「続黄梁」）、および夢と現実の往還をより強調する描写をなしたこと（「藤生救雀」）が指摘され、このような点に石川鴻齋の改作の意図を見いだすことが出来ると論ぜられている。

第3章では、日本系のルーツを持つ漢文怪異小説として「鬼児」および「偽情死」の2作品が取り上げられ、前者が落語「もう半分」の翻案であること、また後者が同じく落語「品川心中」及び「星野屋」の翻案であることが解明されている。そして翻案の過程で石川鴻齋が、前者に関しては原作よりも因果応報の教訓性を強め、落語的なサゲを削除して復讐の側面をより強めていること、また後者に関しては、登場人物の性格描写が原作よりも複雑化されていることが指摘されている。

最後に「結語」の部分で、聶晶氏は石川鴻齋の上記の翻案作品における改作の姿勢を論じている。すなわち聶晶氏は、上記の諸々の作品において、主人公の設定が原作のそれから変更され、また結末の有り様も変化しているという共通点があること、また原作と翻案作品の社会的背景の相違により、原作の不合理と思われる点を石川鴻齋が彼なりの視点で合理化したという特質がある、と指摘している。

本論文の特長としては、(1)従来個別に取り上げられることが殆どであった『夜窓鬼談』の諸々の物語を、一つの論文の中で総体として取り上げようとしたこと、(2)個々の物語の源流を探究し、それらが中国系と日本系に分かれるも

のである実態を解明したこと、そして(3)石川鴻齋の翻案・改作の背景として、明治期の社会的状況を考慮する必要があると指摘し、この点についての調査結果を論文に盛り込んだこと、の3点が挙げられる。聶晶氏はこのような点を明らかにするため、中国の古典から日本の話芸に至る、様々な分野の文献を調査した上で、翻案作品の原作の解明をしている。また石川鴻齋の改作の意図を、作者本人の芸術的志向の面から判断するのみならず、勸善懲惡や立身出世、あるいは科学的思考の普及といった明治時代の文化史的背景をも考慮しようとした点は、高く評価しうる。

このような特質をもつ本論文であるが、改善すべき点がない訳ではない。『夜窓鬼談』のルーツを探る点に関して、とくに日本系とされる原話（落語）が、さらに別の原話に基づくものであった可能性について、今後さらに検討すべきであろうし、石川鴻齋の改作の意図の分析についても、ややもすると平板で概説的な記述に終わる部分があった点については改善の余地がある。しかしながらこうした点は、本論文の価値を損なうものではなく、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。